

シラーとスピノザ ―自然概念をめぐる一考察―

Schiller and Spinoza : A Study on the Concept of Nature

平 山 敬 二 Keiji Hirayama
東京工芸大学名誉教授
宝塚大学東京メディア芸術学部非常勤講師

キーワード：シラー、スピノザ、自然概念、芸術概念、美学

Key Words : Schiller, Spinoza, concept of nature, concept of art, aesthetics

抄録

本論考は、シラーおよびスピノザの諸著作の検討を通して、一般的にはほぼ指摘されることのない両者における自然概念の類似性を明らかにし、それによってシラー美学の特質およびその美学史上の特別な意味を新たに掘り起こすことを目的とする。シラーとスピノザには直接的な影響関係はほとんどないにも拘らず、シラーの美学思想における「美的自由」の概念とスピノザの『エチカ』にみられる「第三種の認識」および「直観的認識」の概念には大きな類似点が捉えられる。この両者には、スピノザが捉える「神即自然」としての自然理解が共通しており、このような自然をシラーは「現実の自然」に対する「真実の自然」として捉え、その「真実の自然」を描写することこそが芸術家の使命であると考えた。このようなシラー美学の根底にある自然観・芸術観は、まさにヘルマン・コルフが言う「ゲーテ時代の精神」に重なるものであり、そのようなシラーの美学思想には、カント美学研究を経た後にもなお、スピノザの自然思想との強い共通性が見て取れるのである。

Summary

Through an examination of the works of Schiller and Spinoza, this article clarifies their similarities in the concepts of nature, which have rarely been pointed out, thereby revealing the characteristics of Schiller's aesthetics and their special significance in the history of aesthetics. Although there is little direct influence between Schiller and Spinoza, there are great similarities between the concept of "aesthetic freedom" in Schiller's thought of aesthetics and the "third kind of recognition" and "intuitive recognition" found in Spinoza's *"Ethica."* They share an understanding of nature as "God is nature," which Spinoza perceives. Schiller regarded this kind of nature as "true nature" in contrast to "real nature," and believed that it was the artist's mission to depict the "true nature." Such a view of nature and art that underlies Schiller's aesthetics overlaps exactly with the "spirit of the Goethe era" that Hermann Korf described. Even after studying Kant's aesthetics, Schiller's aesthetic shares a strong commonality with Spinoza's natural thought.

1、シラーとスピノザの接点

シラー (Friedrich von Schiller, 1759-1805) とスピノザ (Baruch de Spinoza, 1632-1677) との直接的な思想的連関について論ずることには、以下の二つの理由から、本来大きな障壁があると言わざるをえない。第一に、シラーがスピノザの思想について第三者・第三者の媒介を通じて間接的にある程度の見聞を持っていたことは確かであるが、シラー自身がスピノザの著作のどれかを自身で直接に研究する機会を持ったかどうかについては、これまでのシラーにかかわる諸研究においておそらくまったく確認を取ることができていないだけでなく、シラー自身のスピノザにかかわる発言ないし論及もまた、記録に残る限りでは、極めて断片的な限られたものでしかない。第二には、そのような事情のもとに、シラーとスピノザとの関係についての研究も、様々な形でわずかに言及するものはかなりの数に上るが、両者の関係についてそれを意味あるものとして本格的に論じるものは、極めて少ないというのが実情である¹。

スピノザの思想がシラーの時代に特別に注目され、その後のドイツ観念論の展開に決定的に重要な役割を果たしたことを考えると、これは何とも不思議なことのようにも思われる。シラーの周辺を取り巻くドイツ精神史を論ずるときに欠かすことのできない人々、ヘルダー、ゲーテ、ヤコービ、カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル等が、いずれもスピノザ思想と、様々な形でではあるが、それぞれに真剣に取り組み、そのスピノザ思想に対する自らの態度をそれぞれに自らの言葉とともに決定していくことが見て取れるなかで、シラーにおいてはそのようなスピノザ思想についての意見表明は、ほとんど極めてわずかなものに限定されている。これは当時、「無神論者・汎神論者」としての疑念や汚名のもとに、暗黙のうちにスピノザの思想について語ることがタブー視されて

いたことを考慮に入れても、不思議なことと言わざるをえない。

吉田量彦が指摘しているように、スピノザは24歳の誕生日を迎える1656年に、アムステルダムのユダヤ人共同体から「劣悪なる意見および行動」(吉田, 2014)を理由に破門されたのであるが、さらに1670年に『神学・政治論』を匿名で出版した時にも、当時ライプツィヒ大学の哲学教授を歴任したヤーコプ・トマジウス (Jacob Thomasius, 1622-1684) によって、「無神論と紙一重の自然主義」(吉田, 2014)として手厳しく批評され、やがて1674年には政府から禁書の布告を受けるのである²。そしてシラーの時代にあつては、当時広く読まれていたフランスの哲学者ピエール・バール (Pierre Bayle, 1647-1706) の『歴史批評辞典』(1696年、ドイツ語訳; 1741-44年)のなかで、スピノザはその思想の真意がよくわからない無神論者・運命論者として扱われ³、それらの強い影響下にあって、当時のドイツにおいては、一般的にいかに否定的にまた不当にスピノザが扱われていたかということについては、ヘルダー (Johann Gottfried von Herder, 1744-1803) が1787年に著した『神—いくつかの対話』(『神』)の「第一の対話」のはじめに叙述している通りであったと思われる⁴。

ヘルダーは『神』の第一版の序文の冒頭において、十年ないし十二年も前に『スピノザ、シャフツベリ、ライプニッツ』という標題になる予定の著書の構想を温めていたが、それが時代状況のもとに、今回『神』という著作を著すことになった旨を述べているが⁵、ここで言われている「時代状況」というのは、おそらく1781年のカント (Immanuel Kant, 1724-1804) の『純粋理性批判』の出現がもたらした思想的状況、および直接的には1785年に出版されたヤコービ (Friedrich Heinrich Jacobi, 1743-1819) の『スピノザの学説に関するモーゼス・メンデルスゾーン氏宛書簡』(『スピノザ書簡』)にはじまるいわゆる「スピノザ論争」ないし「汎

神論論争」を受けてのものと思われる⁶。

シラーがドレスデンのケルナー (Christian Gottfried Körner, 1756-1831) のもとを離れゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) の住むヴァイマールにやって来たのは1787年の7月で、ゲーテはその時すでにイタリアに出発していて会うことはできなかったのだが、シラーはまもなくヘルダーを訪問している。それを機にシラーは出版されたばかりの『神』をヘルダーから受け取り、それを読む機会を持つ。この時の様子についてケルナー宛ての1787年7月23 [-25] 日付けの書簡では次のように述べられている。(引用)「ヘルダーから一冊の著書を手わたされました。その表題は『神』というものです。スピノザについて扱われたはじめのところは私の気に入りました。他のところは私にとっては明瞭ではありません⁷」(Schiller, 1787)。またさらに翌月の8月8 [および9] 日のケルナー宛ての手紙には、その後まもなく別の機会にヘルダーと交わした次のようなやり取りが記されている。(引用)「私は彼の最新の著書『神』を話題にし、このテーマについて私が考えたいいくつかのことを彼に話しました。そして私なら神の理念から全哲学を導き出すであろうと話しました。彼は私の一連の考えのなかに何か特異なものを見だし、この著書を私が読むことを願うと私に言いました。この著書は私のためになるであろうし、また神についての彼の十全な説得力ある理念を内容として含んでいるであろうと。もしそれを私が捉えていたならば、私は多くの光を手に入れていたでしょう。どうか君もそれを読み、私に君の意見を書いてください。私にとってはこの著書はあまりにも多く形而上学的なものを含んでいます。スピノザに関するはじめのところはとても興味深いです⁸」(Schiller, 1787)。

これはシラーとスピノザ思想との明らかな接点を示す数少ない事例の一つである⁹。他には、1782年に友人たちと共同で出版した『1782年詞華集』のなかに、「スピノザ」と題する6

行からなるエピグラム (寸鉄詩) が掲載されているが、これは1781年にシラーによって書かれた作品とされている。それは以下のようなものである¹⁰。(Schiller, 1782)

SPINOZA

Hier liegt ein Eichbaum umgerissen,
Sein Wipfel thät die Wolken küssen,
Er liegt am Grund — warum?
Die Bauren hatten, hör ich reden,
Sein schönes Holz zum Bau'n vonnöthen,
Und rissen ihn deßwegen um.

スピノザ

ここに一本の樫の木が切り倒されて横たわっている、

その頂は雲にまで達せんばかりであったろう、

その木が地面に横たわっている — 何故に？

農夫たちがそうしたのだ、と語られるのを私は聞いている、

その美しい木材が建築の役に立つ、

そしてそのためにその木を切り倒したのだ。(拙訳)

このエピグラムが書かれた1781年という年は、カール学院を卒業したばかりのシラーが自作の戯曲作品『群盗』(Die Räuber) を匿名で自費出版した年で、それがマンハイム劇場の支配人ダールベルクの目にとり、翌年1月にマンハイムで上演されて空前の成功を収めることになったのである。しかしシラーは、このことが遠因となり、その後シラーが暮らすヴュルテンベルク公国の領主カール・オイゲン公 (Karl Eugen, 1728-1793) の怒りを買ひ、やがて故国を離れて、実に苦勞の多い旅に出ることになるのであった。この「スピノザ」というエ

ピグラムの内容は、スピノザに対してシラーが必ずしも否定的な考えを持っていなかったこと、むしろ清貧に甘んじて深い真理を追究したたぐいまれな偉大な人物を、一般の人々がその真の価値を理解せず、自分たちの目先の実利的な目的のためにまったく台無しにしてしまったというものであり、むしろスピノザの高潔さと偉大さとを讃えるとともに、人々のスピノザに対する無理解を訴えるものになっている。スピノザに対するシラーのこのような捉え方がなぜ成立しているのかということについては、カール学院時代の哲学教授ヤーコプ・フリードリヒ・フォン・アーベル（Jakob Friedrich von Abel, 1751-1829）の影響が大きいのではないかと考えられるが、それについての確かな証拠はないように思える。しかしカール・オイゲン公によって新しく創設されたカール学院は、オイゲン公の意向もあって、哲学のカリキュラムが特別に重視されており、特にアーベルからはライブニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716）やクリスティアン・ヴォルフ（Christian Wolff, 1679-1754）の哲学をはじめイギリスの経験論哲学ならびに道徳哲学を深く学ぶ機会があったと考えられている¹¹（Alt, 2000）。

最初にも指摘したように、スピノザについて語られたシラーの言説は極めて少なく、ゲーテとシラーとの1000通にも上る往復書簡のなかでも、シラーがスピノザ思想に言及しているのは、ゲーテ宛ての1794年10月28日付けの書簡のなかで、1794年5月にイェナ大学に赴任したばかりのフィヒテにたいして、すでに敵対する者たちが現れており、やがて彼らはフィヒテを「主観主義的なスピノザ主義者」（Goethe, 1794）に帰しかねないと憂えている一か所のみである¹²。ちなみにシラー宛てのゲーテからの書簡にはスピノザないしスピノザ主義という語は、管見のところ、おそらく一か所もないのではないと思われる¹³。ヤコービに対してヘルダーに対しても自らのスピノザ評価を変えなかったと思われるゲーテが、自らがシ

ラーの死後1829年に公刊したシラーとの往復書簡のなかでスピノザについての言及を極力抑えているようにも思えなくもない。いずれにせよ、ヤコービによるレッシング（Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781）がスピノザ主義者であったという指摘がメンデルスゾーン（Moses Mendelssohn, 1729-1786）を驚愕させ、レッシングの名誉を守るために懸命に弁明の努力をしようとする自体、当時スピノザ主義者とみなされることが、いかに危険で不名誉なこととして捉えられるものであったのかということを如実に示していると言えるだろう。

以上みてきたように、シラーがスピノザないしスピノザ主義について直接に言及した事例は、極めて僅少であり、またシラーの主要な著作のなかにスピノザの名が出てくることは一度もない。しかもシラーのスピノザについての言及は、おそらくすべて第二者・第三者によるスピノザ理解を通して得たほとんどは間接的な形のスピノザ理解に基づくものであり、ヘルダーの『神』のなかにあるスピノザの『エチカ』からの引用や、そこで取り上げられているヤコービの『スピノザ書簡』からの引用を別にしても、スピノザのテキストに直接触れて得られたスピノザ理解に基づくものであるとは考えにくい¹⁴。この点に関しては、すでに指摘したように、数少ないシラーとスピノザとの関係を本格的に論じようとする論者においてもほぼ皆一致するところである。

そのようなわけで、ヤコービ¹⁵にはじまる「スピノザ論争」に直接かかわる当時のシラーを取り巻く思想家たちのうちにあつて、シラーとスピノザとの関係を論ずることは、とりわけ困難であるばかりでなく、あまり意味のないこととも考えられることが多いのではあるが、しかし決してそうとばかりは言えない面があるとも思われる。それは、シラーとスピノザの思想に見られる不思議な類似点と共通点にかかわる問題である。以下、シラーの美学思想とスピノザ思想とを比較する形で、特に両者における

「自然」と「神」の概念および「自由」の概念について考えてみたい。

2、「ユリウスの神智学」における神と自然

シラーとスピノザの思想が同じであるということはもちろん言うことはできないであろう。青年期のシラーはライプニッツ＝ヴォルフ学派の哲学やイギリスのシャフツベリー (the third Earl of Shaftesbury, 1671-1713) やファーガソン (Adam Ferguson, 1723-1815) の道徳哲学ならびに、故国であるヴェルテンベルクに深く根付いていた敬虔主義 (ピエティスムス) の強い影響下にある。カント哲学との出会い以降は、カントの批判哲学を積極的に受容し、その強い影響下に彼の思想は展開して行く。そのようなシラーにあって、スピノザとの類似点や共通点は、どこに見いだすことができるというのであろうか。以下この点について、シラーのカント研究以前とカント研究以降とに分けて、それぞれ具体的な事例をもとに検討していきたい。

まずカント研究以前のシラーにおいて、スピノザ思想との連関が指摘されるものについての検討からはじめたい。それは1786年にシラーが編集発行した「タリーア」誌第3号に掲載された『哲学的書簡』(Philosophische Briefe)と題されたエッセーについてである¹⁶。この文学的・哲学的エッセーは、シラー自身とその友人ケルナーにも対比されうるユリウスとラファエルという名の二人の若者の間に交わされる書簡の形式をとった思想的対話で構成されているのであるが、特にそのうちのシラー自身と重ねて捉えられるユリウスによって語られる「ユリウスの神智学」(Theosophie des Julius)と題される個所が問題になる。そのなかでユリウスは自身が捉えている「神」について次のように語っているのである。(引用)「宇宙におけるあらゆる完全性は神において一体化されている。神と自然とはまったく等しい二

つの偉大さである。——神の実体のなかでともに存在する調和的な活動の全総体は、この実体の模写である自然のなかに無数の度合いと量と段階で分かたれている。自然は(この比喩的な表現を許せ)自然は無限に分かたれた神である。——プリズムにおいて一条の白い光が七つのより暗い光線に分裂するように、神の自我(das göttliche Ich)は、無数の感覚実体に分裂したのである。七つのより暗い光線が一条の明るい光の帯に再び融合するように、これらすべての実体の合一から神の本来の姿が結果として生じるであろう¹⁷」(Schiller, 1786)。

また「ユリウスの神智学」の冒頭には、次のような記述もある。(引用)「宇宙は神の思想である。この理想的な精神像が現実のなかへと入って行き、そしてその生み出された世界がその創造者の設計図を満たしたあとでは、—この人間的な表象を私に許せ—この現存する全体のなかに最初の図面を再び見つけ出すこと、機械のなかに規則を、組み立てのなかに統一を、現象のなかに法則を探し出すこと、そしてその見取り図へと遡ってその構造を書き写すことが、すべての思考する存在者の任務である¹⁸」(Schiller, 1786)。

先に述べたように、シラーの『哲学的書簡』が「タリーア」第3号に発表されたのは1786年であるが、そのなかの「ユリウスの神智学」の内容のほとんどのものはその思想内容からみて、すでにシラーのカル学院時代にまで遡るものと考えられている¹⁹。おそらくそれは『1782年詞華集』に掲載されている「スピノザ」という短詩が書かれた1781年とそれほど離れていない時期であろうと思われる。それは1783年4月14日のラインヴァルト宛てのシラーの書簡の内容に「ユリウスの神智学」と同様の内容が書かれていることから確認できる²⁰ (Schiller, 1783)) (Lahnstein, 2004)。

はたして『哲学的書簡』に見られるこのような記述のなかに、われわれはスピノザ思想との類似点ないし共通点を見て取ることができる

のであろうか。従来のシラー研究の多くは、このようなシラーによる記述とスピノザ思想との連関については言及せず、そこにライプニッツ思想の影響を見て取るのが一般的である。特に『モナドロジー』の第47節に説かれる次のようなライプニッツの「神性放射説」にその根拠が求められる。(引用)「そこで神だけが、原初的な「一」、つまり本源の単一実体で、創造されたモナド、つまり派生的モナドはすべてその生産物にはかならない。これらのモナドは、いわば時々刻々、神の身から不断に放射されている閃光(Fulguration)によって生み出されるが、本性上有限な被造物のならいとして、(神のささえを)うけなければ生きてゆけないということが、モナドの立場を制限しているわけなのである²¹⁾」(Leibniz, 1720)。

他にも、プリズムによる7色の光線と白色光線との例えなどを、ファーガソンに由来するものとの説もあるが、これについての確証はないとされている²²⁾ (Koopmann, 1963)。しかし青年シラーがクリスティアン・ガルヴェ(Christian Garve, 1742-1798)訳によるファーガソンの『道徳哲学』をそのガルヴェによる註とともにほとんど暗唱するほどに気に入って学んでいたということは、よく知られている事実である²³⁾ (Safranski, 2004)。またここにシラーがその信奉者であったともいわれるヴェルテンベル地方の敬虔主義者フリードリヒ・クリストフ・エッティンガー(Friedrich Christoph Oetinger, 1702-1782)の影響を捉え、その新プラトン主義的かつヤーコプ・ペーメの神秘主義に基づくシュヴァーベン神智学とのつながりを指摘するヴァルター・ミュラー＝ザイデルのような研究者たちもいる²⁴⁾ (Riedel, 1998)。

先にも指摘したように、青年期のシラーはライプニッツ＝ヴォルフ学派の哲学の強い影響下にあったし、またシャフツベリーやファーガソンなどのイギリスの道徳哲学を積極的に学んでいただけでなく、エッティンガーのような敬虔主義との強い結びつきが考えられる以上、

「ユリウスの神智学」における上記のような記述のなかにそれらの思想的影響を見て取ることは当然なことかもしれないし、またそれぞれにそれらの指摘は根拠あるものとも言える。それに対して青年期のシラーとスピノザとの関係にかんしては、カール学院時代にアーベルなどからスピノザ哲学について学んだ可能性は考えられるもののそれについての明確な証拠があるとは言えない。ただ一つ青年期のシラーとスピノザとの関係については、『1782年詞華集』に掲載された「スピノザ」と題された6行からなる短詩があるだけである。

しかしここにスピノザ思想の反映を見る論者がまったくいないわけではない。近年では、ヴィンフリート・ヴァイアー(Winfried Weier, 1934-2013)がシラーとスピノザ思想との類似をその神と自然との一致の思想のなかに見て取り、「ユリウスの神智学」における「神と自然とはまったく等しい二つの偉大さである。」(Schiller, 1786)という思想のなかに、スピノザの『エチカ』の第Ⅱ部・定理7で論じられる以下の内容との符合を指摘している²⁵⁾ (Weier, 2005)。(引用)「観念の秩序と連結は、ものの秩序と連結と同じである。--この結果として、神の思惟する能力は、神の活動する現実的な能力にひとしいことになる。いいかえれば、神の無限の本性から形相的に生ずるすべてのものは、神の観念から同じ秩序、同じ連結によって、神のうちに客観的に(観念として)生ずるのである²⁶⁾」(Spinoza, 1677)。

同じように、ヴァイアーは指摘していないが、『エチカ』第Ⅰ部の定理16における次のような記述にも「ユリウスの神智学」との符合を見て取ることができるかもしれない。(引用)「神の本性の必然性から、無限に多くのものができる[すなわち、無限知性によってとらえることのできるすべてのものが]、無限に多くの仕方では生じてこなければならない。--ところで神の本性は、そのおのおのが自己の類において無限の本質を表現する絶対無限数の属性をもってい

るから、―その神の本性の必然性から無限に多くの仕方でも必然的に生じてこななければならない²⁷⁾」(Spinoza, 1677)。

古いものでは、ヴァイアーも例示しているフリードリヒ・ユーバーヴェーク (Friedrich Überweg, 1826-1871) の1884年における次のような指摘がある。(引用)「スピノザの諸様態 (Modi) と光線の分裂にたとえられるあのシラーの神性の自己分割は、その分けられた諸要素から再統一によって根源的な統一が生み出されうるのであるが、両者において絶対的なもののある種の自己限定として個物が現出するというかぎりにおいて、たがいに類似するものをもっている²⁸⁾」(Überweg, 1884)。ヴァイアーもユーバーヴェークもともにシラーとスピノザ思想との類似と共通点について論じているのではあるが、しかしそこにある相違点をも、ともに指摘している。特にユーバーヴェークはシラーによって語られるユリウスの神哲学とスピノザの体系には、その哲学的諸原理においてもまた宗教的教理の点においても相違する面のあることを指摘している。日本の内藤克彦は、青年期シラーについての詳細な研究を『シラー研究第1巻』・『シラー研究第2巻』としてまとめているが、そのなかで「カール学院時代のシラーの道德思想は、キリスト教的道德観を基礎とする、ライプニッツ、シャフツベリ、ファーガソン/ガルヴェの道德論に強く影響を受けたものであった。²⁹⁾」と指摘しつつ、なお青年シラーの思想にはライプニッツをも超えていこうとするスピノザ的な神即自然に基づく汎神論的な側面があり、そのような精神的基盤は、カント研究以後の晩年にまで至るシラーの思想的基盤につながっていることを指摘している³⁰⁾。

3、スピノザの「第三種の認識」とシラーの「美的自由」

1789年にイエナ大学に招聘されて以降、シ

ラーはカントの歴史哲学とのそれ以前における出会いを経て、やがて『判断力批判』を中心としたカントの批判哲学の研究に打ち込むようになる。そのなかから次第にシラー独自の美学が形成されていくことになるのだが、カント哲学はなによりもまずシラーにとって真に刮目すべきものとして受け取られ、彼がいかにカント哲学を重要なものとみなしていたかは、友人ケルナーへの1793年2月18日付けの書簡のなかの次のような記述からもうかがうことができる。(引用)『汝を汝自身によって規定せよ (Bestimme dich aus dir selbst)』というこのカントの言葉は、同時に彼の全哲学の内容でもあります。理論哲学における、『自然は悟性法則のもとに従う (Die Natur steht unter dem Verstandesgesetze)』という言葉と同じように、これ以上偉大な言葉が死すべき人間によって語られたことはまだなかったにちがありません。自己規定というこの偉大な理念が、自然のある種の現象からわれわれに反映してくるのです。そしてそれをわれわれは美 (Schönheit) と呼ぶのです³¹⁾ (Schiller, 1793)。

この「自然のある種の現象からわれわれに反映 (strahlen) してくる」ところの「偉大な理念」としての「自己規定 (Selbstbestimmung)」というものから、やがてシラーは美を「現象における自由 (Freiheit in der Erscheinung)³²⁾」にほかならないとするシラー美学における根本的なテーゼを提示するに至るのである。本来カント哲学に基づけば、超感性的なもの以外は、いかなるものも自由ではありえないはずであるが、その自由が現象において捉えられるところにシラーは美を見ていることになる。シラーがここで捉えている「自由」がいかなるものであるかということはカント哲学との関係でも非常に重要な問題ではあるが、とにかくここではシラーがそのように捉えたということのみを確認しておきたい。以後のシラー美学は基本的に自然の美ばかりでなくあらゆる芸術の美も、また人の魂や行為の美しさまでも、すべて

この現象に現れ出る自由によって捉えていくことになるのである。

シラーのこのような美学思想から見たとき、そこにはもちろんかなりの相違も前提されねばならないと思われるが、まず注目されるのは、スピノザが『エチカ』のなかで提示する「第三種の認識」というものとシラー美学における「美的自由」の概念の類似性である。スピノザは『エチカ』第Ⅴ部の定理36の注解において次のように述べている。(引用)「私が直観的認識あるいは第三種の認識 (cognitio tertii generis) と呼ぶ個物の認識が、どれだけ多くのことをなしうるか、またそれが第二種の認識と呼ばれる一般的認識よりもどれだけ有能であるかをこの例によって示すことは、やりがいのあることだと思ったのである³³」。ここで述べられる「第二種の認識」および「第三種の認識」というのは、「第一種の認識」に対して言われるものであり、『エチカ』第Ⅱ部においてまず提示されているものである。これら三種類の認識のあり方は、それぞれ、「意見あるいは想像知 (opinion vel imaginatio)」による認識、「理性 (ratio)」による認識、「直観知 (scientia intuitiva)」による認識に相応するもので、想像知による第一種の認識は、たんにものの非十全で混乱したあり方における認識であるのに対し、理性による第二種の認識は、ものの特質についての共通概念ならびに十全な観念をもつ認識である。さらに第Ⅱ部定理41で示されているように、第一種の認識は虚偽の唯一の原因であり、これに反して、第二種、第三種の認識は必然的に真の認識であり、十全な観念をもつ認識であるとされる³⁴。

しかし先にも示したように、第三種の認識による個物の認識は、第二種の認識と呼ばれる一般的な認識よりもはるかに多くのことをなしうるものであり、第Ⅴ部定理25では、「精神の最高の努力、最高の徳は、ものを第三種の認識によって認識することである。」とされ、さらに同部定理27では、「この第三種の認識から、

存在しうる精神の最高の満足が生じてくる。」とされている。そして同部定理32では、「われわれは、第三種の認識によって認識するすべてのことを楽しむ。しかもこの楽しみは、原因として神の観念をともなっている。」とされ、なぜならば、同定理の系 (corollarium) にあるように、「第三種の認識から、必然的に神への知的愛が生じてくる。」からにはほかならないとされている。この「神への知的愛 (amor Dei intellectualis)」は同時に「精神の最高の満足」であり「最高の喜び」であるとされる³⁵。そして同部定理42にあるように、「至福は神への愛にある」のであり、また「至福は徳の報酬ではなく、徳そのものである。われわれは快楽を抑えるから至福を楽しむのではなく、むしろ逆に至福を楽しむから快楽を抑えることができるのである。」とされているのである³⁶。

『エチカ』はこの第Ⅴ部定理42をもって最後となるのであるが、その注解において、「以上によって、感情にたいする精神の能力と精神の自由について述べようとしたすべてのことを終えた。³⁷」とスピノザは述べている。この「感情にたいする精神の能力と精神の自由」というものの解明とその確立こそ、まさにシラーが美の問題として追求し続けたものにほかならないとわれわれは考えることができるのではないであろうか。それは様々な点から言えると思われるが、シラー美学の代表的な著作の一つ、カント美学研究ののちに著わされた『人間の美的教育について——連の書簡』(『美的教育書簡』)(1795年)のなかで論じられる「美的自由 (ästhetische Freiheit)」の概念の意味するものについて、以下に考察してみたい。

カント哲学からの大きな影響を基に、シラーはその美学の確立に向けて、まずカント的な二元論を考察の基礎としている。超感性的な観知界と感性的な感性界、理性と感性との二元論である。カントが美の問題を基礎づけた『判断力批判』のなかの「美しいものの分析論」において、美を捉える人間の認識能力のあり方を、「構

想力と悟性との自由な遊動 (freies Spiel der Einbildungskraft und des Verstandes)³⁸」として捉えたことを受け、シラーはさらにカントがその先で展開する「崇高なものの分析論」をも取り込む形で、美的なものの一般を理性と感性との遊動 (Spiel) として捉えていくことになる。そこからシラーは、人間のなかに働き、人間をその内側からその目的の実現に向けて駆り立てる根本的な二つの力をそれぞれに「衝動 (Trieb)」として捉え、一方を感性的衝動としての「素材衝動 (Stofftrieb)」とし、他方を理性的衝動としての「形式衝動 (Formtrieb)」として導き出すのである³⁹。そして美はまさにその両者の「交互作用 (Wechselwirkung)」として生み出されるものとして捉えられ、そのような両者の交互作用を導く働きを、人間における「遊戯衝動 (Spieltrieb)」として捉えるのである⁴⁰。

この美を生み出す衝動である遊戯衝動は、精神的存在であると同時に肉体的存在でもある人間存在の根源的二元性に同時に働きかけ、そこに調和をもたらすことによって、言葉の本当の意味における「人間性 (Menschheit)⁴¹」を実現させるものとして捉えられるのである。そこからシラー美学において有名な次のフレーズが提示されるのである。(引用)「人間は、言葉の完全な意味において、人間であるときのみ遊び、また遊ぶところのみ全く人間である⁴²」。この遊戯衝動の働きについては、次のようにも述べられる。(引用)「人間のすべての状態のなかで、遊戯が、そして遊戯だけが彼を完全なものとし、その二重の本性を同時に展開させるものである⁴³」。そこでは同時に、自然法則の物質的強制からも道徳法則の精神的強制からも解放された「真の自由 (wahre Freiheit)⁴⁴」がはじめて実現するものと考えられる。人間には不可能ではあるが、その理想として求められる理性と感性との一致、それはまさに神性においてのみ可能なものであるが、その神性へ向かおうとする人間の努力は、

人間にとっての「真の自由」である「美的自由 (ästhetische Freiheit)⁴⁵」へ向かおうとする努力にはかならない。しかもその道はまさに人間の感性のなかに開かれるべきものとされるのである。(引用)「この神性への道 (der Weg zu der Gottheit)、もしも決して目標に到達しないものを道と呼ぶことができるならば、それは彼の感覚のなかに開かれているのである⁴⁶」。

スピノザの『エチカ』において説かれる想像知に基づく「第一種の認識」、理性に基づく「第二種の認識」、直観知に基づく「第三種の認識」という弁証法と、シラーにおける感性的衝動としての「素材衝動」、理性的衝動としての「形式衝動」、その両者の総合としての「真の自由」である美的自由へと向かおうとする「遊戯衝動」という弁証法に、かなり類似したスピノザの「神への知的愛」への希求をわれわれは見ることができるのではないであろうか。

4、シラー美学における自然概念とスピノザ

スピノザは、1675年11月または12月に書かれたとされるオルデンプルク宛て書簡のなかで、1670年に出版した『神学・政治論』がその後多くの非難とともにやがて禁書処分を受けることになった状況のなかで、スピノザが考える自然概念と、近代の一般のキリスト教徒たちが考えている自然概念との違いについて、次のように述べている。(引用)「私は神及び自然については近代のキリスト教徒たちが通常説いている見解とはまるで異なった見解を抱いております。即ち私は、神がいわゆる万物の内在的原因であって超越の原因ではないと見ています。私は敢えて、いっさいが神の中に生き神の中に動いていると主張しています。―しかし或る人々が、神学・政治論は神と自然を同一視する思想に立脚していると考えているのは、自然というものを一定の質量或いは一定の物質的物体と解しての上ですから、全然誤っております⁴⁷」(Spinoza, 1675)。スピノザはこの書簡の

なかであわせて、パウロのような近代以前のキリスト者や「おそらくすべての古代の哲学者たち」ならびに、「古代のすべてのヘブライ人たち」も、近代のキリスト教徒のように自然というものを「一定の質量或いは一定の物質的物体」などとは考えていなかったことを指摘している。スピノザに言わせれば、神と自然を同一視することが非難されるのは、自然というものを「物質的物体」としか見ていない近代人の誤った考えによるのだということになるだろう。

かつてヘルマン・コルフ（Hermann August Korff, 1882-1963）はその著『ゲーテ時代の精神』（1923年）のなかで、彼がゲーテ時代と呼ぶ1770年－1830年の約60年におよぶ時代における自然概念のあり方について、次のように述べている。（引用）「生き生きとした自然（die lebendige Natur）、生き生きとした神（der lebendige Gott）、それらは、生命として理解された自然と神的なるものとして理解された生命という同じ事柄についての二つの異なった表現に過ぎない。そしてそれは『自然』というこの言葉においてゲーテ時代が感じ取っていたところのものであった。それは脱神聖化された機械的な自然科学の自然ではなくて、新たな宗教性についての理解に基づく神聖なるものとして崇められた自然のことである⁴⁸（Korff, 1923）」。

さらにコルフは、「ライプニッツとスピノザとは、全然相異なる方法による新しい世界感情の助産者であった。⁴⁹」とし、いわゆるシュトゥルム・ウント・ドラングの世界感情の哲学的基礎は、「ライプニッツでもスピノザでもなく、ライプニッツ的に解釈されたスピノザ主義、すなわち主意主義的（voluntaristisch）かつ個人主義的な汎神論となる両哲学者の融合である。⁵⁰」と考えている。コルフは、シラーの時代ともドイツ観念論の生成する時代とも重なるこの「ゲーテ時代」を貫くものの本質を、17世紀以来の科学革命によってもたらされた「世界の自然科学的神性剥奪⁵¹」の危機を越え

て、哲学的にはスピノザとライプニッツによって切り開かれた「新たな世界感情」を基礎に、再び世界を神的なものとして捉え返す「新しい神の感情（ein neues Gottgefühl）⁵²」の生成に向けられた努力のなかに見ていると言えるであろう。

シラーの美学にもまた、近代という時代への強い否定がその根底にあるのだが、しかしそれは近代への肯定と表裏一体のものでもあった。つまりシラーにとって、近代という時代は古代におけるような人間と自然との調和的在り方が失われた人工的な時代であり、そこでは人間性の内なる自然は破壊され、理性と感性との分裂の下に、本来あるべき人間性の総体的なあり方も失われてしまっている。その意味で自然との調和のうちに最高の文化を築き上げた古代ギリシャの文化は、近代人にとって限らない憧憬の対象となるのであるが、しかしまた一方で、古代から近代への人類の歩みは、いわば人類の歴史の必然性でもあり、それはちょうど一人の人間がいつまでも幼年時代にはとどまりえず、必然的に成人へと向かって成長していくことにもなぞらえられている⁵³。そして人類の向かうべき道は、この近代における理性と感性の分裂を乗り越えて、自然との新たな調和を未来へ向けて築き上げていくことであるとされているのである。

シラーによれば、「現実の自然（wirkliche Natur）」はどこにでもあるが、「真実の自然（wahre Natur）」はそれだけまれなのである⁵⁴。そして芸術の使命は、この「真実の自然」を人々の前に描き出し人々にそれを指し示すことにあると考えられている。シラーによって1803年に書き上げられ出版された戯曲『メッシーナの花嫁』の冒頭には、晩年のシラーのまとまった芸術論として貴重なものとされる「悲劇における合唱団の使用について」と題された小論が掲載されている。そのなかでシラーは次のように述べている。（引用）「自然そのものは精神のまさの一つの理念であって、それは

決して感覚されることはない。自然は現象という覆いの下に横たわっていて、それ自身は決して姿を現さないのである。万物のこの精神を把握し、一個の身体的形式に纏めるということは、理想の芸術のみに与えられた、あるいはさらにそれに課せられた任務である⁵⁵⁾ (Schiller, 1803)。

かつてシュプランガー (Eduard Spranger, 1882-1963) は、シラーの著作における自然概念について論ずるなかで、シラーの自然概念は実に多様なあり方を示すが、しかしその根本は、「能産的自然 (natura naturans)」と「所産的自然 (natura naturata)」の両者として捉えられるとしている⁵⁶⁾。この「能産的自然」と「所産的自然」という捉え方は、中世に深く根差すものであるが、スピノザもまた『エチカ』の第Ⅰ部定理29の注解においてこれらの語について述べている。(引用)「われわれは能産的自然を、それ自身において存在しそれ自身によって考えられるもの、あるいは永遠・無限の本質を表現する実体の諸属性、つまり-自由原因と考えられる限りの神と理解しなければならない。-これに反して所産的自然とは、-神のうちに存在し、神が存在しなければ存在することも考えられることもできないと見なされるかぎりの、神の諸属性のすべての様態のことである⁵⁷⁾」(Spinoza, 1677)。スピノザはここで、「能産的自然」は神として理解すべきものであり、「所産的自然」は神の様態のことであるとしている。先に言及したシラーの「真実の自然」と「現実の自然」の対比は、そのまま「能産的自然」と「所産的自然」に相応するものであると考えられる。そうであるならば、シラーが近代を未来に向けて乗り越えるために要請する芸術の任務は、まさにスピノザの「神」を描き出すこと、すなわち「神への知的愛」でありまた「神の知的愛」であるものを描き出すことであると言えるのではないであろうか⁵⁸⁾。

最初に見たように、具体的な歴史的事実としては、シラーとスピノザとの接点は極めてわず

かなものであるし、また両者の思想的背景には大きく異なるものがある。しかしこれまでいくつかの点において検証したように、両者にはことのほかその思想内容において重なるものが多々あるように思える。シラーが生きたのはまさにゲーテの時代であり、ドイツ観念論が生成する時代であった。そしてその時代を代表する思想家たちがいずれも、実に多様な形ではあるが、スピノザとの対決をへてそれぞれ独自の道を切り拓いていった。シラーはそのなかでむしろ例外的に直接スピノザに言及することはほとんどなかったが、しかし少なくともその時代を覆っていたスピノザ的なものとの出会いのなかで、シラーもまたその美学的探求の道において、スピノザが切り拓こうとした未来への道をシラー独自のあり方で受け止めたということができないのではないであろうか。

—終わり—

注

¹ シラーとスピノザないしスピノザ思想との関係について論じたものは、管見のかぎり、古い研究も含めて、極めてわずかなものにかぎられていると思われる。しかもその多くは、他の思想家とシラーとの関係を論ずるなかでわずかにスピノザ思想との関係について言及するもので(例えば、Friedrich Alfred Schmit, *Schiller als Theoretischer Philosoph*, *Kantstudien*, 10, Berlin, 1905, S.280f. Frederick Beiser, *Schiller as Philosopher, A Re-Examination*, Oxford, 2005, p.222.など)、シラーとスピノザとの関係を本格的に論じようとするものは、極めて稀である。近年の研究にかぎれば、そのようななかにあって、シラー美学とスピノザ思想との類似性について本格的に論じたものとして、次の3論攷を挙げることができる。Rodony Taylor, *Schiller's Spinozan Theory of God and its Relation to the Person*, in: *Perspectives on Spinoza in Works by*

Schiller, Büchner, and C. F. Meyer, Frankfurt u.a. 1995. Winfried Weier, Die Identität von Idee und Natur in Gott nach Spinoza und Schiller, in: *Idee und Wirklichkeit, Philosophie deutscher Dichtung*, Paderborn u.a. 2005. 長倉誠一「フリードリヒ・シラーとスピノザ主義」、武蔵大学人文学会雑誌、武蔵大学人文学会編、第38巻（通号151）、2007年、55-82頁。これら三者は、その論攷においてそれぞれにシラーのスピノザについての言及が極めて少ないこと、シラーが直接スピノザの著作を読んでいたとはなかなか言えないこと、またシラーとスピノザとの関係についての研究がほとんどないことに言及している。Taylor, *ibid.*, p.5. Weier, *ibid.*, S.184. 長倉, 同論文、56頁。

² スピノザ『神学・政治論(下)』吉田量彦訳、光文社、2014年、p.370。吉田量彦による「『神学・政治論』解説、四、同時代の反響とその後」参照。

³ 栗原隆・須藤訓任・加藤泰史・平尾昌宏・上野修「<座談会>虚軸としてのスピノザ(Ⅱ)ードイツ観念論とその後ー」、『思想』no.1080所収、岩波書店、2014年、60頁。加藤泰史「カントとスピノザ(主義)ースピノザ主義の哲学的挑戦と批判哲学の危機ー」、『思想』no.1080所収、岩波書店、2014年、145-147頁。

⁴ ヨハン・ゴットリープ・ヘルダー『神ー第一版・第二版、スピノザをめぐる対話』吉田達訳、叢書・ユニヴェルシタス1087、5-8頁。Johann Gottfried Herder, *Gott, Einige Gespräche*, Gotha: Karl Wilhelm Ettinger, 1787, S.1ff.

⁵ ヘルダー、同上書、3頁。J. G. Herder, *ibid.*, S.IIIff.

⁶ ヘルダー、同上書、吉田達による第1版序文訳註2、389頁、および同訳者解説中の「汎神論論争について」、416-421頁。フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ『スピノザの学説に関する書簡』田中光訳、知泉書院、28-36頁、同訳者田中光による巻末の「ヤコービ年譜」1780年以降の当該項目。

⁷ Friedrich von Schiller, *Briefe 1785-1787*, Schillers Werke Bd.24, National Ausgabe(=NA), in Verbindung mit Walter Müller-Seidel herausgegeben von Karl Jürgen Skrodzki, Weimar, 1989, S.111.

⁸ *Ibid.* S.125.

⁹ 長倉誠一は、先に提示した論攷のなかで、シラーとスピノザ思想との接点として、本稿で取り上げたヘルダーとの関係についても詳しく論じると同時に、ラインホルト(Karl Leonhard Reinhold, 1757-1823)やゲーテからの影響の可能性についても言及している。また同氏は、「シラーとシェリングースピノザ主義者の美の理論ー」(武蔵大学人文学会雑誌、第42巻(3・4)通号166・167号、武蔵大学人文学会編、2011、188-220頁)においてスピノザ思想にかかわる両者の関係について論じるとともに、先に提示したフレデリック・バイザーによるシラーにおけるスピノザ主義についての指摘にも言及している。同論攷、209頁。

¹⁰ Schiller, *Gedichte*, Schillers Werke Bd.1, NA, herausgegeben von Julius Petersen und Friedrich Beißner, Weimar, 1943, Unveränd. fotomechan. Nachdr., 1992, S.65。(綴りについては一部現代表記に改めた。)

¹¹ Peter-André Alt, *Schiller—Leben—Werk—Zeit, I・II*, Erster Band, 2000, München, S.113-124.

¹² 『ゲーテ＝シラー往復書簡集(上)』森淑仁・田中亮平・平山令二・伊藤貴雄訳、潮出版社、2016年、50頁。Schiller, *Briefe 1794-1795*, Schillers Werke Bd.27, NA, herausgegeben von Günter Schulz, Weimar, 1958, S.74. 周知のように、フィヒテはその後「無神論者」としての告発を受け、1799年にはイエナ大学を追放されることとなった。

¹³ 『ゲーテ＝シラー往復書簡集(下)』森淑仁・田中亮平・平山令二・伊藤貴雄訳、潮出版社、2016年、下巻末の上・下巻全体の人名索引によると、しかしまた「ライプニッツ」という名前も一度も出てこない。

¹⁴ スピノザの著作『神学・政治論』は1670年に、また『エチカ』は1677年の死後間もなく出版された『遺稿集』のなかに『国家論』『知性改善論』『ヘブライ文典綱要』『往復書簡集』とともに収められている。上野修によれば、シュミット (Johann Lorenz Schmidt, 1702-1749) による『エチカ』のドイツ語訳は1744年に出版されており、またハインリッヒ・エーベルハルト・ゴットロープ・パウルスによるスピノザ著作の初の校訂版全集 (Benidictus de Spinoza, Opera, quae supersunt omnia, 2 Bde., addidit Heinrich Eberhard Gottlob Pauls, Jena: Bibliopolio Academico, 1802-03) がイエナで1802-03年に出版されている (上掲書『思想』47頁)。シラーは幼年期から学びはじめさらにカール学院時代を通じて学んだラテン語にはかなり習熟していたが、これらの書を直接読む機会があったかどうかは確認されていない。また『神学・政治論』のドイツ語訳は、平尾昌宏によれば、ベックマン版の著作集 (Spinozas philosophische Schriften, 3 Bde., übersetzt und herausgegeben von Schack Hermann Ewald, Gera: Christoph Friedrich Bekmann, 1787-93) におけるものが最初と考えられる (上掲書『思想』60頁)。

¹⁵ シラーが主催する文芸雑誌『ホーレン』のために、ヤコービはシラーの求めに応じて、1795年に「ある孤独な思索者の心中の吐露 (Zufällige Ergiessung eines einsamen Denkers in Briefen an vertraute Freunde)」を寄稿し、その第8号に掲載されるが、その原稿を受け取ったシラーは、その論攷を高く評価し、ゲーテ宛て書簡のなかで、次のように述べている。「ヤコービが彼の論文を送ってくれました。この論文には優れたものが多くあります。とりわけ他の人々の考え方への判断における公平さがあります。そしてあらゆる点において自由な哲学の香りがします。」(田中光、上掲同書、「ヤコービ年譜」、35頁、田中光の訳による。) cf. Schiller, *Briefe 1795-1796*, Schillers

Werke Bd.28, NA, herausgegeben von Norbert Oellers, Weimar, 1969, S.11-12, S.349.

¹⁶ ロドニー・テイラーは、先に提示した彼の論攷のなかで、F.A.Schmidがシラーの「ユリウスの神智学」においてそのスピノザ主義を読み取ることができるとしていることを踏まえ、さらにシラーの『美的教育書簡』中の第11書簡において提示される「人格 (Person)」概念と「状態 (Zustand)」概念のなかにスピノザ思想との類似性を見ている。Rodony Taylor, op. cit., S.6.

¹⁷ Schiller, *Philosophische Briefe, Philosophische Schriften Erster Teil*, Schillers Werke Bd.20, NA, unter Mitwirkung von Helmut Koopmann herausgegeben von Benno von Wiese, Weimar, 1953, Unveränd. fotomechan. Nachdr., Weimar, 2001, S.123-124.

¹⁸ Schiller, *ibid.*, S.115.

¹⁹ Schiller, *Philosophische Schriften Zweiter Teil*, Schillers Werke Bd.21, NA, unter Mitwirkung von Helmut Koopmann herausgegeben von Wenno von Wiese, 1963, S.160, S.151-154.

²⁰ Schiller, *Briefe 1772-1785*, Schillers Werke Bd.23, NA, herausgegeben von Walter Müller-Seidel, Weimar, 1956, S.79. cf. ペーター・ラーンシュタイン『シラーの生涯—その生活と日常の創作』上西川原章訳、叢書・ユニベルシタス 791、法政大学出版局、2004年、180頁。

²¹ ライプニッツ『モノドロジー』清水富雄・竹田篤司訳、『ライプニッツ・モノドロジー・形而上学叙説』所収、中央公論新社、2016年、18頁。Gottfried Wilhelm Leibniz, *Monadologie, Französisch/Deutsch*, Reclam, Übersetzt und herausgegeben von Hartmut Hecht, 2017, S.36-37.

²² *Philosophische Schriften Anmerkungen zu Band 20, Philosophische Schriften Zweiter Teil*, Schillers Werke, Bd.21, NA, unter Mitwirkung von Helmut Koopmann herausgegeben von Wenno von Wiese, 1963, S.164f.

²³ Rüdiger Safranski, *Schiller oder Die Erfindung des Deutschen Idealismus*, München u.a. 2004, 72f.

²⁴ Wolfgang Riedel, Schiller und die popularphilosophische Tradition, in: Helmut Koopmann, *Schiller Handbuch*, Stuttgart, 1998, S.160.

²⁵ Winfried Weier, op. cit., S.187-188.

²⁶ スピノザ『エチカ』工藤喜作・斎藤博訳、中央公論新社、2007年、91頁。(観念として)は翻訳者工藤による注記。*Spinoza Opera II*, Carl Gebhardt(ed.), Heidelberg, 1925, S.89.

²⁷ スピノザ『エチカ』、同上書、34-35頁、〔 〕内はスピノザによる補説。*Spinoza Opera II*, op. cit., S.60.

²⁸ Friedrich Überweg, *Schiller als Historiker und Philosoph*, Leibzig, 1884, S.85.

²⁹ 内藤克彦『シラー研究第1巻』、南江堂、1972年、46頁。

³⁰ 内藤克彦『シラー研究第1巻』、同上書、25頁、39頁、内藤克彦『シラー研究第2巻』、南江堂、1977年、163頁ff.

³¹ Schiller, *Briefe 1790-1794*, Schillers Werke Bd.26, NA, herausgegeben von Edith Nahler und Horst Nahler, Weimar, 1992, S.191. シラー『美学芸術論集』石原達二訳、富山房、1977年、21988年、31頁。ケルナー宛書簡1793年2月18日。

³² Schiller, *ibid.*, S.199-200. (邦訳同書、43-44頁、ケルナー宛書簡1793年2月23日。)

³³ スピノザ『エチカ』、同上書、454頁。*Spinoza Opera II*, op. cit., S.259.

³⁴ スピノザ『エチカ』、同上書、147頁。*Spinoza Opera II*, op. cit., S.78. S.79.

³⁵ スピノザ『エチカ』、同上書、450頁。*Spinoza Opera II*, op. cit., S.256.

³⁶ スピノザ『エチカ』、同上書、461頁。*Spinoza Opera II*, op. cit., S.263.

³⁷ スピノザ『エチカ』、同上書、462頁。*Spinoza Opera II*, op. cit., S.264.

³⁸ Immanuel Kant, *Kritik der Urteilkraft*, 1790,

S.218. (頁付けはアカデミー版第5巻による。)

³⁹ Schiller, Über die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen, zwölfter Brief, *Philosophische Schriften Erster Teil*, Schillers Werke Bd.20, op. cit., S.344-345. (シラー『美学芸術論集』石原達二訳、富山房、1977年、21988年、133-135頁、第12書簡。)

⁴⁰ *Ibid.*, vierzehnter Brief, S.352-354. (邦訳同書、144-146頁、第14書簡。)

⁴¹ *Ibid.*, zehnter Brief, S.340. (邦訳同書、128頁、第10書簡。)

⁴² *Ibid.*, fünfzehnter Brief, S.359. (邦訳同書、153頁、第15書簡。原文は、“der Mensch spielt nur, wo er in voller Bedeutung des Worts Mensch ist, und er ist nur da ganz Mensch, wo er spielt.”となっている。石原達二訳では、“er ist nur da ganz Mensch, wo er spielt.”の個所が、「人間は--遊ぶときにのみ全き人間である。」となっているが、ここは、“ganz”を形容詞としてではなく、そのまま副詞として訳し、「人間は--遊ぶときにのみ全く人間である。」とすべきところと考えられる。)

⁴³ *Ibid.*, fünfzehnter Brief, S.358. (邦訳同書、152頁、第15書簡。)

⁴⁴ *Ibid.*, S.359. (邦訳同書、154頁、第15書簡。)

⁴⁵ *Ibid.*, S.376. (邦訳同書、175頁。第20書簡の註釈。)

⁴⁶ *Ibid.*, S.343. (邦訳同書、132頁、第11書簡。)

⁴⁷ 『スピノザ往復書簡集』畠中尚志訳、岩波書店、1958年、51976年、325頁(書簡73:オルデンプルク宛書簡)。*Spinoza Opera IV*, Carl Gebhardt(ed.), Heidelberg, 1925, S.307.

⁴⁸ Hermann Korff, *Geist der Goethezeit; Versuch einer ideellen Entwicklung der klassischromantischen Literaturgeschichte, Erster Teil: Sturm und Drang*, Leipzig, 1923, S.99. (松永譲一訳『ゲーテ時代の精神』第一巻、桜井書店、1944年、145頁。)

⁴⁹ *Ibid.*, S.102. (邦訳同書、150頁。)

⁵⁰ *Ibid.*, S.103. (邦訳同書、151頁。)

⁵¹ Ibid., S. X. (邦訳同書、8頁。)

⁵² Ibid., S.103. (邦訳同書、151頁。)

⁵³ Cf. Schiller, Über die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen, sechster Brief, *Philosophische Schriften Erster Teil*, Schillers Werke Bd.20, op. cit., S.326. Schiller, Über naive und sentimentalische Dichtung, *Philosophische Schriften Erster Teil*, op.cit., S.438. (邦訳同書、『美的教育書簡』第6書簡、108頁、『素朴文学と情感文学について』、261頁。)

⁵⁴ Schiller, Über naive und sentimentalische Dichtung, op.cit., S.476. (邦訳同書、313頁。)

⁵⁵ Schiller, Über den Gebrauch des Chors in der Tragödie, op.cit., Bd.10. S.9-10. (シラー「悲劇における合唱団の使用について」菅原太郎訳、『シラー選集第2巻』所収、富山房、1941年、51943年、541頁。)

⁵⁶ Eduard Spranger, *Schillers Geistesart gespiegelt in seinen philosophischen Schriften und Gedichten*, Aus den Abhandlungen der Preußischen Akademie der Wissenschaften Jahrgang 1941, Phil.-hist. Klasse Nr.13, Berlin, 1941, S.28f.

⁵⁷ スピノザ『エチカ』、同上書、55頁。*Spinoza Opera II*, op. cit., S.27.

⁵⁸ 上野修『スピノザの世界―神あるいは自然』、上野氏はこの著書のなかで、「ラテン語で『神の知的愛』(amor Dei intellectualis) と言うときの『の』は、『神が愛する愛』とも『神に対する愛』ともとれる。スピノザは同時にその両方で読ませようとしているのである。」と指摘している。185-186頁。

*本稿は、2019年9月28日(土)に一橋大学にて開催された第29回一橋哲学フォーラム・第9回スピノザコネクションにて口頭発表した原稿に加筆・訂正したものである

文献リスト

Alt, P.-A., (2000): *Schiller—Leben-Werk-Zeit, I・II*, H.C.Beck, München, Erster Band, 113-124.

Beiser, F. (2005): *Schiller as Philosopher, A Re-Examination*, Oxford, 222.

Goethe, W. v. (1828): Briefwechsel zwischen Schiller und Goethe(4). 森淑仁・田中亮平・平山令二・伊藤貴雄(訳): ゲーテ=シラー往復書簡集(上), 50, 潮出版社, 2016.

Herder, J. G., (1787): *Gott, Einige Gespräche*. 吉田達(訳): 神—第一版・第二版、スピノザをめぐる対話, 3. 5-8. 389. 416-421 法政大学出版局, 叢書・ユニヴェルシタス1087, 2018.

Jacobi, F. H., (1785): Über die Lehre des Spinoza in Briefen an den Herrn Moses Mendesssohn(3). 田中光(訳): スピノザの学説に関する書簡, 28-36. 35, 知泉書院, 2018.

Kant, I. (1790): *Kritik der Urteilkraft*, 218. (頁付けはアカデミー版第5巻による。)

加藤泰史(2014): カントとスピノザ(主義)―スピノザ主義の哲学的挑戦と批判哲学の危機―, 思想, no.1080, 岩波書店, 145-147.

Koopmann, H. (1963): *Philosophische Schriften Anmerkungen zu Band 20, Philosophische Schriften Zweiter Teil*, Schillers Werke, Bd.21, NA, unter Mitwirkung von Helmut Koopmann herausgegeben von Wenno von Wiese, 151-154. 160. 164-165.

Korff, H. (1923): *Geist der Goethezeit; Versuch einer ideellen Entwicklung der klassischromantischen Literaturgeschichte, Erster Teil: Sturm und Drang*, Leipzig, 1923, X. 99. 102. 103.

Korff, H. (1923): *Geist der Goethezeit; Versuch einer ideellen Entwicklung der klassischromantischen Literaturgeschichte, Erster Teil: Sturm und Drang*. 松永譲一(訳), ゲーテ時代の精神 第一巻, 8. 145. 150.

151. 桜井書店、1944.
- 栗原隆, 須藤訓任, 加藤泰史, 平尾昌宏, 上野修 (2014): <座談会>虚軸としてのスピノザ(Ⅱ) —ドイツ観念論とその後—, 思想, no.1080, 岩波書店, 47. 60.
- Lahnstein, P. (1981): Schillers Leben — Biographie. 上西川原章(訳), シラーの生涯 —その生活と日常の創作, 180. 叢書・ユニベルシタス791, 法政大学出版局、2004.
- Leibniz, G. W. (1720): *Monadologie*, *Französisch/Deutsch*, Reclam, Übersetzt und herausgegeben von Hartmut Hecht, 2017, 36-37.
- Leibniz, G.W. (1720): La Monadologie. 清水富雄, 竹田篤司, 飯塚勝久(訳), ライプニッツ・モナドロジー・形而上学叙説, 18, 中央公論新社、2016.
- 長倉誠一 (2007): フリードリヒ・シラーとスピノザ主義, 武蔵大学人文学会雑誌、武蔵大学人文学会編、第38巻(通号151), 56, 55-82.
- 長倉誠一 (2011): シラーとシェリングースピノザ主義者の美の理論—, 武蔵大学人文学会雑誌、第42巻(3・4)通号166・167号、武蔵大学人文学会編、188-220. 209.
- 内藤克彦 (1972): シラー研究第1巻、南江堂、25. 39. 46.
- 内藤克彦 (1977): シラー研究第2巻、南江堂、163-185.
- Riedel, W. (1998): Schiller und die popularphilosophische Tradition, in: Helmut Koopmann, *Schiller Handbuch*, Stuttgart, 160.
- Safranski, R. (2004): *Schiller oder Die Erfindung des Deutschen Idealismus*, München u.a. 72f.
- Schiller, F. v., (1782): *Gedichte*, Schillers Werke Bd.1, NA, herausgegeben von Julius Petersen und Friedrich Beißner, Weimar, 1943, Unveränd. fotomechan. Nachdr., 1992, 65. (綴りについては一部現代表記に改めた。)
- Schiller, F. v. (1783): *Briefe 1772-1785*, Schillers Werke Bd.23, NA, herausgegeben von Walter Müller-Seidel, Weimar, 1956, 79.
- Schiller, F. v. (1786): *Philosophische Briefe*, *Philosophische Schriften Erster Teil*, Schillers Werke Bd.20, NA, unter Mitwirkung von Helmut Koopmann herausgegeben von Benno von Wiese, Weimar, 1953, Unveränd. fotomechan. Nachdr., Weimar, 2001, 115. 123-124.
- Schiller, F. v., (1787): *Briefe 1785-1787*, Schillers Werke Bd.24, National Ausgabe (=NA), in Verbindung mit Walter Müller-Seidel herausgegeben von Karl Jürgen Skrodzki, Weimar, 1989, 111. 125.
- Schiller, F. v. (1793): *Briefe 1790-1794*, Schillers Werke Bd.26, NA, herausgegeben von Edith Nahler und Horst Nahler, Weimar, 1992, 191.
- Schiller, F. v. (1793): *Briefe 1790-1794*. 石原達二(訳)、シラー美学芸術論集(第2版), 31(ケルナー宛書簡1793年2月18日). 富山房, 1988.
- Schiller, F. v. (1794): *Briefe 1794-1795*, Schillers Werke Bd.27, NA, herausgegeben von Günter Schulz, Weimar, 1958, 74.
- Schiller, F. v. (1795): *Briefe 1795-1796*, Schillers Werke Bd.28, NA, herausgegeben von Norbert Oellers, Weimar, 1969, 11-12. 349.
- Schiller, F. v. (1795): Über die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen, *Philosophische Schriften Erster Teil*, Schillers Werke Bd.20, NA, unter Mitwirkung von Helmut Koopmann herausgegeben von Benno von Wiese, Weimar, 1953, Unveränd. fotomechan. Nachdr., Weimar, 2001, 326 (sechster Brief). 340 (zehnter Brief). 343 (elfter Brief). 344-345 (zwölfter Brief). 352-354 (vierzehnter Brief). 358-359 (fünfzehnter Brief). 376 (zwanzigster

- Brief).
- Schiller, F. v. (1795): Über die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen. 石原達二(訳), シラー美学芸術論集, (『人間の美的教育について』), 108(第6書簡), 128(第10書簡), 132(第11書簡), 133-135 (第12書簡), 144-146(第14書簡), 152-154(第15書簡), 175(第20書簡註釈), 富山房、1977. 1988(第2版).
- Schiller, F. v. (1796): Über naive und sentimentalische Dichtung. 石原達二(訳), シラー美学芸術論集, (『素朴文学と情感文学について』), 261. 313.
- Schiller, F. v. (1796): Über naive und sentimentalische Dichtung, *Philosophische Schriften Erster Teil*, Schillers Werke Bd.20, NA, op.cit. 438. 476.
- Schiller, F. v. (1803): Über den Gebrauch des Chors in der Tragödie, Schillers Werke Bd.10. NA, 9-10.
- Schiller, F. v. (1803): Über den Gebrauch des Chors in der Tragödie. 菅原太郎(訳), 悲劇における合唱団の使用について, (シラー選集第2巻所収), 富山房、1941, 1943(第5版), 541.
- Schmit, F.A. (1905): Schiller als Theoretischer Philosoph, *Kantstudien*, 10, Berlin, 280-281.
- Spinoza, B. d. (1670): *Tractatus theologico-politicus*. 吉田量彦(訳), 『神学・政治論(下)』, 370, 光文社、2014.
- Spinoza, B. d. (1677): *Ethica*. 工藤喜作・斎藤博(訳): エチカ, 第I部定理16, 34-35, [] 内はスピノザによる補説. 第I部定理29注解, 55. 第II部定理7, 同系, 91, (観念として)は翻訳者工藤による注記. 第II部定理41, 147. 第V部定理32系, 450. 第V部定理36注解, 454. 第V部定理42, 461. 第V部定理42注解, 462. 中央公論新社、2007.
- Spinoza, B. d. (1677): *Ethica, Spinoza Opera II*, Carl Gebhardt (ed.), Heidelberg, 1925, Pars I, Propositio 16, 60. Propositio 29 Scholium, 27. Pars II, Propositio 7, Corollarium, 89. Pars II, Propositio 41, 78, 79. Pars V, Propositio 32, Corollarium, 256. Pars V, Propositio 36 Scholium, 259. Pars V, Propositio 42, 263. Pars V, Propositio 42 Scholium, 264.
- Spinoza, B.d. (1675): *Spinoza Opera IV*, Carl Gebhardt (ed.), Heidelberg, 1925, 307. 畠中尚志(訳), スピノザ往復書簡集, 325(書簡73: オルデンプルク宛書簡). 岩波書店、1958. 1976(第5版).
- Spranger, E. (1941): *Schillers Geistesart gespiegelt in seinen philosophischen Schriften und Gedichten*, Aus den Abhandlungen der Preußischen Akademie der Wissenschaften Jahrgang 1941, Phil.-hist. Klasse Nr.13, Berlin, 1941, 28-29.
- Taylor, R. (1995): Schiller's Spinozan Theory of God and its Relation to the Person, in: *Perspectives on Spinoza in Works by Schiller, Büchner, and C. F. Meyer*, Frankfurt u.a., 5. 6.
- Überweg, F. (1884): *Schiller als Historiker und Philosoph*, Leibzig, 85.
- 上野修 (2005): スピノザの世界—神あるいは自然, 講談社現代新書, 185-186.
- Weier, W. (2005): Die Identität von Idee und Natur in Gott nach Spinoza und Schiller, in: *Idee und Wirklichkeit, Philosophie deutscher Dichtung*, Paderborn u.a., 184. 187-188.